三岩岳～ミチギノ沢～窓明山
～安越又川･東沢スキー

斎藤　憲一

■山行年月日:平成 30 年 3 月 26 日～27 日

■メンバー:斎藤憲一(単独)

■コースタイム

26 日　国道待機所 7：15～三岩岳山頂 13：00－13：30～ミチギノ沢Ｃｏ1400m14：00－14：30～窓明山直下 16：15（テント泊）

27 日　テント 8：45～窓明山頂 9:00-9:20～Ｐ1589m（デポ地点）9：40～東沢 Co1200m9：50-10:20～デポ地点 11:50－13：00～国道 15:30

以前から気になっていた三岩岳北面のミチギノ沢、そして窓明山北東面の安越又川上流域。ここを効率的につないで楽しむためには、余裕を持って二泊が必要かなとの考えで計画をした。この山行を共に楽しんでくれるメンバーがいることを期待したのだが、残念ながら付合ってくれるパートナーはおらず、単独となってしまったことから、天気に合せて平日の山行となった。

3 月 26 日（月）

自宅を 4：30 に出発し、保太橋沢先の国道脇の待避所をほぼ目標の時間に出発する。いつものように小沢をアプローチして 1000m地点でブナの尾根に乗り、三岩岳や窓明山などの景観を楽しみながら進んで、1300m地点の鞍部から少し上のブナの大木近くで休憩していると、男女二人のパーティが追いついてきた。話をすると女性の方が『塩川在住で福島登行会所属』だという。私が『会津山岳会』だというと、『有名ですよね！』と返された。結局このパーティとは山頂まで前後しながら登って行った。

山頂からは二人は往路を滑降していき、私は一人、風があり、部分的にクラスト気味のミチギノ沢に慎重に滑り込む。滑り初めは樹林帯なので、右の窓明山への稜線を意識しながら慎重に滑っていくが、1700m地点までの樹林帯を抜けると遮るもののない広い沢状になり、快適に目標とした窓明山への枝尾根の

滑降したミチギノ沢の斜面

末端まで滑降を楽しむ。自分の下ってきたシュプールを眺めようと振り返ると、シュプールの右脇には更に魅力的な真っ白な凹状の斜面が広がっていて、次に来る機会があれば絶対にあそこだなと思わせるルートが確認できた。

さて、十分に楽しんだ後は窓明山への登りであるが、目星を付けていた枝尾根はそこそこの傾斜のある登りなのだが、特に問題になるような所もなく、比較的順調に窓明山直下まで進むことができた。ここまで来れば、明日一日で目標をこなして下降できるだろう。

樹林の窪地にテントを張り、まずはコーヒーを沸かして、夕暮れに輝く山並みの景色を堪能しながら、人里離れた一人の夜を満喫する。

窓開山直下の一夜の宿

3 月 27 日（火）

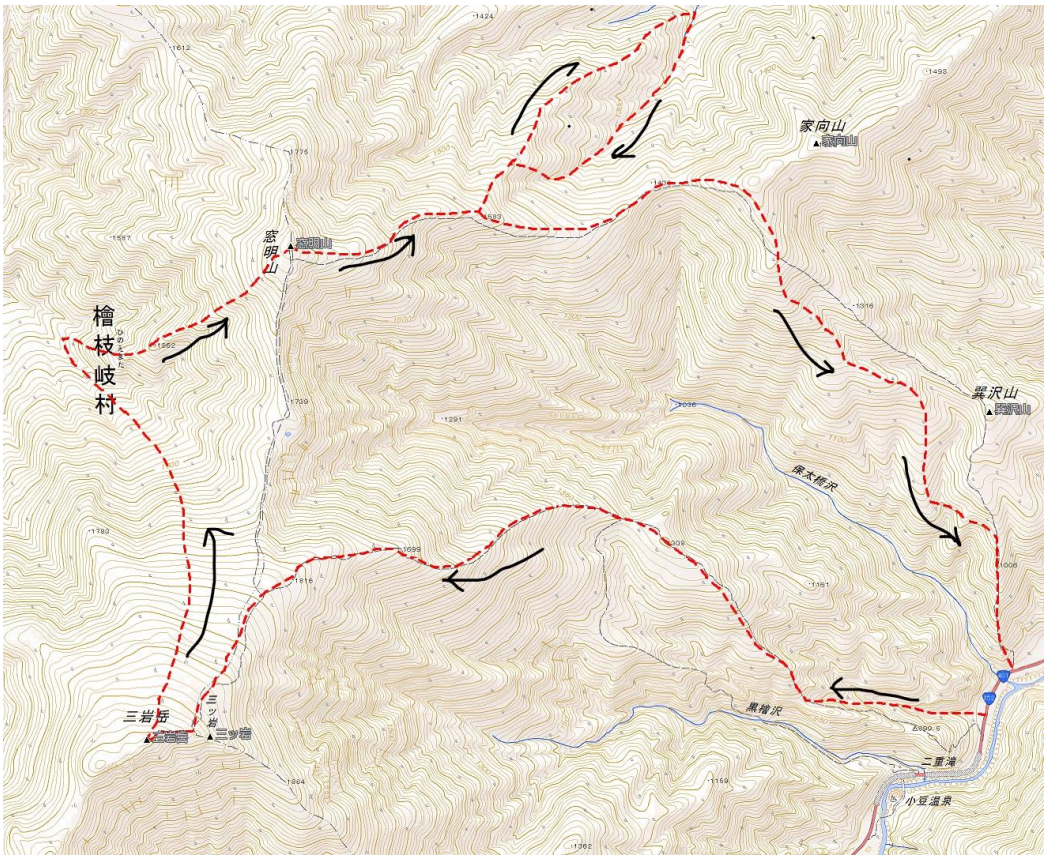
今日の行程は余裕があることからのんびり出発し、まずは窓明山頂に立って、今日も快晴に映える周囲の山々の景観を楽しむ。山頂からの広大な斜面は、まさに快適そのものではあるが、あっという間に 1583mの目標の枝尾根の分岐点に滑り降りてしまった。ここに余分な荷物をデポして、早々に目標の枝尾根に

安越又東沢の支稜中間部

向けて滑り込む。

今日は無風快晴で、雪の表面がザケていて思い切って滑っていける。一気に滑ることも可能だが、もったいなくて何度も立ち止まりながら、景色と滑降を体感して下っていくが、あっという間に末端の沢に下りきってしまった。何とも超快適な尾根であった。この周辺の尾根は傾斜も適度で、その末端はなだらかに沢へ合流しているので、どこでも滑り降りることができる。また、沢筋も雪崩の心配もなさそうだ。

さて、滑った後は稜線までの登り返しだが、概ね沢の右岸を進み、最後の小尾根を詰めて滑った枝尾根の上部に出て、デポ地点まで戻る。サブでの行動は快適そのものであった。窓明山・家向山・坪入山に囲まれた安越又川・東沢・西沢流域は、山スキーにはうってつけのコースが色々選択できる素晴らしいゲレンデであろう。

デポしたザックを背負い、ここから鞍部まで滑って、家向山の分岐まで若干登り返すと、ここから最後の滑降となる。しばらくは快適な斜面が続くため、楽しい滑りを求めていくと、次第に主稜線から離れて行き、結果は巽沢山手前で尾根を一本間違えて滑ってしまい、このまま進めば保太橋沢へ出てしまうという状況になってしまったことから、藪の濃くなった小尾根を苦労しながら回り込んで登山道に戻り、途中から雪の繋がっている小さな沢状を滑って、無事国道に達することができた。

最後が何とも締まりの無い山行となってしまったが、一泊での周回コースとしては十分に楽しめた一人の山旅となった。